

記念号の刊行にあたって

北川 浩

本年3月31日をもちまして、経済学部で長い間勤務されましたロナルド・ザブスラク (Ronald S. Zavislak) 先生が退職されました。ザブスラク先生は1993年4月に助教授として成蹊大学経済学部に来られ (1999年4月に教授に昇進)、それから23年間にわたり主として英語教育の分野で本学部の教育研究に多大な貢献をされました。ここに本号を先生の退職記念号として、ささやかながら先生の長年の功績に対して感謝の意を表したいと思います。

ザブスラク先生は1970年メリーランド大学日本語研修コースを終了された後、日本に来られ1975年上智大学国際学部 (政治学極東歴史専攻) 卒業後、1981年に同大学院外国語学研究科修士課程 (国際関係論比較文化専攻) を修了され、さらに1989年に米国バーモント州の School for International Training の教育学修士課程を修了されました。日本における英語教育に専心するという高い理想と強い情熱をもって、1993年に成蹊大学の専任教員に就任され、本学部の助教授、教授として教育・研究に携わってこられました。ザブスラク先生は、経済学部の英語教育のみならず成蹊大学全体の英語教育の発展に情熱を注がれ、さらに成蹊大学の国際交流活動の発展にも多大な貢献をされてきました。

1995年に経済学部ではザブスラク先生を中心として「国際社会コース」(2004年度から「国際社会プログラム」(ISIP)に改名)が創設されました。集中的な英語教育のみならず国際感覚を養い世界で活躍する人材を育成することを目的としたコースで、履修区分として経済学部の中にコースをもつことは当時としては画期的な試みでした。ザブスラク先生が存在なしにはこのコースの創設はあり得なかったと思います。その後、ザブスラク先生はこのコースの発展に精力的に尽力され、まさにつねに経済学部の国際化教育の中心に存在していたと言っても過言ではありません。

英語教育に関してもさまざまな独自の工夫を行い、学生のやる気を引き出し、楽しく英語を修得していく手法をつねに追究されてこられました。2010年以降、英語教育が全学的なコントロール下で行われるようになってから後も、国際教育センター所員として英語教育プログラムの開発運営に多大な貢献をされてきました。ザブスラク先生の創造的な英語教育手法とその成果は多くの論文にまとめられ全学的に注目されるものとなっています。

さらに、成蹊大学全体の国際交流活動においても、1999年度から2001年度まで成蹊大学国際交流センター所長（兼国際交流会館館長）として在任され、その後も国際教育センターの委員、所員として、学生の留学促進のための活動や新たな協定留学先の開拓などに多大な貢献をされてきました。

ザブスラク先生はよく「日本人より日本的」な人と評されるほど、日本を心から愛し、日本の習慣や風習に馴染んできた人でした。教授会等では得意ではない日本語で堂々とご自身の意見を述べられ、他の意見にも真剣に耳を傾けられていた姿がとても印象に残ります。成蹊に来られた当初は書類や教員向けの指示などに英語表記はまったくなく、事務的なサポート体制もまったくなかったため、いろいろとご苦労をおかけしたものと推察いたします。にもかかわらず、教員として他の日本人教員以上に適切に業務をこなし、多くの学生にも慕われるような授業を長年にわたって実践されてきたことに対して、あらためて頭が下がる思いです。心から「お疲れ様でした」と言いたいと思います。

ザブスラク先生が心血を注いだ経済学部「国際社会プログラム」は、ザブスラク先生のご退職と時を同じくして、本年度から全学的なコースに再編されました。ザブスラク先生が成蹊大学に残した足跡を振り返ってみるにつけ、「教育に情熱を傾け、真に学生を愛した」特筆すべき教員がまた一人経済学部から去って行かれることに大きな寂しさを禁じ得ません。最後になりましたが、ザブスラク先生の成蹊大学経済学部への多大な貢献に感謝申し上げますとともに、先生のますますのご健勝ご活躍をお祈り申し上げます。

（成蹊大学経済学部長）